
「異端憲兵」

早苗月 槐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「異端憲兵」

【Nコード】

N5062L

【作者名】

早苗月 槐

【あらすじ】

大正妖都。

帝都に巣くう魔の手から、

国を守りし一人の男。

陸軍服に身を包み、

異端を刈りしその人を、

人はこう呼ぶ。

異端憲兵。

暗闇に映える一筋の朱。

白い肌に落ちる - -

さながら新雪に落ちる牡丹の花弁。

黒い紋付きを着た男は暗い愉悦に引きつった笑いを浮かべる。

時は大正。

所は帝都。

西洋文化を貪欲に取り込む日の本の魔都。

今宵の夜もまた、血塗られた惨劇が。

男は、寒さに震えていた。

桜の花舞う季節とは言え、未だ夜は冷える。

瓦斯灯の照らす公園は夢幻のよう。

はらりはらりと積み重なる桜花は、雪を思わせた。

自身の想像に尚更身震いを覚え、襟をかき寄せ体を縮こまらせる。

桜の樹の下には死体が埋まっている。

そう言ったのは何処の文学人だったか。

あながち嘘でも無いと男は知っていた。

そう、ここ上野の地では。

幕末の戦で散った者達がこの地下には眠っている。

目眩を覚え、ふらりと足を泳がせれば、桜花の中に足が沈むかの
ような錯覚へ陥る。

自嘲の笑みを浮かべた男はゆつくりと、桜の海を歩く。

その足は何処へ向かうものか。

程して、道の中ほど。

一人の少女が道を歩いていた。

西洋式の水兵じみた、セーラーといったか、学生服。

斯様な夜に一人歩くとは何事か。

彼女はぼんやりと、桜を眺めていたのだ。

「もし」

男は声を掛ける。

少女は振り返る。

長い髪を翻らせて。

白い肌。

「何か御用でしょうか」

育ちの良さを伺わせる、はっきりとした口調。

男は少し眩しそうに目を細めた。

「斯様な時間にご婦人がお一人では危うくはございませんか」

男のその言葉に少女は答えず、再び桜を見上げた。

沈黙がしばし。

桜の落ちるおとのみが、しばし。

「彰義隊」

「は」

少女はぼつりと言った。

それは幕末、上野の地で散った旧幕軍の英傑達の名。

「私の祖父が、彰義隊の者。だったのです」

士族の娘。

彰義隊の末裔。

「御祖父様の供養というわけで」

男は言って、桜を見上げる。

艶めいたそれは妖しげに揺れた。

「ええ」

と少女は頷き、しかし首を傾げる。

「いえ、どうなのでしょうね」

ようやく年相応にはにかんだ。

「私は祖父に合った訳では有りませんので」

知りもせぬ人間に話した事を、今更ながらに恥じるかのように少女は顔を伏せた。

「自分も」

男は口を開く。

「彰義隊について調べていまして」

少女は、はつと顔を上げる。

「学者様かなにかで？」

「いやいや、只の趣味にございます」

しかし、と桜の花弁を一片握りしめ、男は言う。

「彰義隊の方はさぞ無念でありましたでしょう」

賊軍等と謗られ。

桜の下で安らかなる眠りなぞ望めまい。

「だから」

男の言葉に首を傾げる少女。

「大日本帝国などという幻想を打ち破るのに、誂え向きだ」

今までの口調とは打って変わった陰鬱な声。

男の異常に少女が気付くが、もう遅い。

男の手刀が少女の細首に吸い込まれ、一瞬にて、意識を刈り取った。

「はは、ははははは」

壊れたように笑う男。

「かようにも贅に相応しい者が手に入るとは」

男は丁寧な手つきで少女を地面へと寝かせる。

そして、懷から取り出すは、短刀。

幾人もの命を奪ったかのように、濤乱に乱れた刃紋には脂が浮く。今正に、短刀を振り上げ、降ろさんやとした所であった。

夜を裂く金色が、男の手を穿った。

取り落とされる短刀。

甲高い音が夜の公園に鳴り響く。

「何奴!？」

男の問いに答えるかのように、夜陰からまろび出たのは帝国陸軍服。

外套を羽織り、深く被った軍帽にて、特徴を伺う事は出来ない。さながら、軍服が一人歩きしているかのよう。

「邪魔をすらば……」

切る。と男は再度短刀を握る。

腕に自信があるのだろう。

現実、短刀を握る右手を前に、左手を帯に当てた構えは堂々としたものだ。

軍服は、それに対し、外套を後ろに流し応える。

前の開いた外套から見える腕には腕章。

映える、憲兵の文字。

手を添えた左腰の鞘は、本来のサーベルに非ず、刀。

鞘から思われる長さは三尺に届かん程の長刀。

右手は柄に添えられ、握りはしない。

居合を遣うのだ。

男は考える。

待ちの短刀に対し、居合は苦手とする一つ。

初太刀をかわせばあるいは。

軍服は一迅の風となり、駆ける。

男の考えは、無意味な物であった。

一定しないながらも疾走するその歩方が読めなかったのである。

銀光一閃。

横一文字に切り払われた刀は狙い過たず、男の右腕を裂いた。

腱が断たれては刀は振るえない。

啞然とする男に、無慈悲にも、留めの一撃が加えられる。

上段に振り上げた刀の、唐竹割り。

軍服は、直刃の美しい刀を血振りし納めた。

帽子に手を当て、僅かに持ち上げる。

まるで外来人のような白い肌。

青い瞳。

軍人にしては長すぎる髪。

彼は少女を抱きかかえ、その場をただ後にする。

残されたのは物言わぬ骸。

夜尚艶やぐ桜だけ。

彼は帝都に巣くう異端を刈る者。

帝都を守護する彼もまた異端。

故にこう呼ばれる。

異端憲兵。と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5062/>

「異端憲兵」

2010年10月20日19時17分発行